



= 駆け足で眺めるクラシック音楽の歴史 =

(参考書：「もう一度学びたいクラシック」(西東社))

・クラシック音楽の歴史はおおまかに次のようになります。

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1：「中世」(6世紀頃～15世紀中頃) | 5：「ロマン派」(19世紀初頭～20世紀) |
| 2：「ルネサンス」(15世紀～17世紀中頃) | 6：「近代」(1890年～1920年) |
| 3：「バロック」(17世紀初頭～18世紀中頃) | 7：「現代」(1920年～) |
| 4：「古典派」(18世紀中頃～19世紀初頭) | |

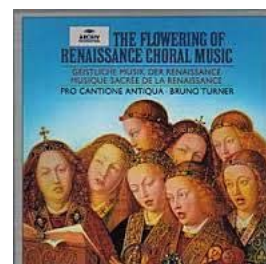
1：中世(6世紀頃～15世紀中頃)：中世音楽は「聖歌」から始まった

中世の音楽は教会音楽が主流で、クラシック音楽の歴史は8世紀頃ローマ・カトリック教会の典礼(神に対する儀式)のための聖歌「グレゴリオ聖歌」に始まるといわれている。最初は、楽器の伴奏がなく1本の旋律(モノフォニー)だけで歌われていた。11世紀に入って中世の修道僧グイードによりドレミの原型が考案され、これによりグレゴリオ聖歌に新しい旋律を加えて歌われるようになり、複数の旋律からなる音楽(ポリフォニー)が誕生してくる。



2：ルネサンス(15世紀～17世紀中頃)：フランスで栄えた音楽界のルネサンス

ルネサンス音楽は、フランスのブルゴーニュ地方の音楽家によって開拓され、フランドル地方(現在の東フランスからベルギーにかけての地域)で花開いた。合唱音楽を中心に声楽が栄え、カトリック教会のもっとも重要な典礼で奏されるミサ曲や教会の一般会衆でも歌うことができる単旋律の歌いやすい聖歌コラールが新しく作られるようになる。



※ルネサンスは「再生」「復活」を意味するフランス語で、古代ギリシア、ローマの文化(絵画、彫刻、建築、文学)を復興しよとする文化運動。14世紀にイタリアで始まり、やがて西欧各国に広まっていく。「ルネサンス音楽」と呼ばれるものの多くは、古代の音楽を復興した音楽という意味ではなく、美術、芸術、文化史における「ルネサンス」期に対応する時代の音楽という意味。

3：バロック(17世紀初頭～18世紀中頃)：宮廷向けに作られた豪華絢爛な“ゴテゴテ”音楽

バロック音楽は17世紀初頭のフィレンツェで登場したオペラによって始まるといわれている。ルネサンス時代の後期になると、「調和」を重んじたそれまでの音楽とは異なる音楽がイタリアで現れる。ヴァイオリンやピアノなど、現在のクラシック音楽の中心を担う楽器が進歩し、器楽音楽が本格的に発展すると同時に、以前から続く声楽音楽の系譜に連なる形でオペラなどの歌劇が誕生する。モンテヴェルディによる歌劇「オルフェオ」により劇と音楽が一体となった、豊かな表現力をもつジャンルとしてのオペラの基礎が確立される。また、「オルフェオ」ではモンテヴェルディは楽器編成を細かく指定し、各場面の描写に適した楽器を選ぶなど、この作品はオーケストラの起源となったともいわれている。

バロック時代は宮廷や劇場、教会など様々な場所で音楽文化が発展。この時代の音楽家は、王族や貴族をスポンサーとする職業音楽家で、「職人」のような存在で、スポンサーの意向を汲んだ作品づくりに励み、豪華絢爛で起伏の激しい、いってしまえばゴテゴテした作風の音楽が主流となる。「喜び」や「悲しみ」などを音楽の“型”によって表現したのもバロック音楽の特徴とされる。また、低音声部が曲全体をしっかりと支える「通奏低音」を基本としていることも、この時代の音楽の特徴といわれる。



※「バロック」とは、「いびつな真珠」という意味です。この言葉は表現の過剰を批判するために、もともと美術作品に対して使われた。

※代表的な作曲家

クラウディオ・モンテヴェルディ (1567～1643) アントニオ・ヴィヴァルディ (1678～1741)
ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685～1750) ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル (1685～1759)

4 : 古典派 (18 世紀中頃～19 世紀初頭) : 理論や形式が精練確立した“キッチリ”音楽

バロック時代までの音楽家は、王や貴族の注文や教会での必要に応じて作曲する「職人」だった。しかし、18 世紀後半になると市民層の繁栄とともに音楽が普及・浸透し、公開演奏会が発展する。演奏家や作曲家は自分の個性と人気に応じた収入を得られるようになり、作曲家が楽譜を出版して収入を得るシステムがようやく誕生してくる。音楽家たちはスポンサーから自立し、「自分の芸術表現のために」音楽を作ることに注力する。

この時代になるとバロック期に生まれた音楽のさまざまな理論や形式が、精練され、確立されてくる。バロック以前に主流だった「多声音楽」がなくなって「和声音楽」が主流となり、また、展開や結びなど、それぞれに構成上の明確な役割を持たせた 4 つの章から構成される「ソナタ形式」が確立されるのもこの時代。オーケストラによる「交響曲 (シンフォニー)」や、オーケストラとソロ奏者が共演する「協奏曲 (コンチェルト)」、ヴァイオリン×2・ヴィオラ・チェロによる「管弦四重奏曲 (カルテット)」など、ソナタ形式の一種である曲もこの時代には多数生まれた。整然とした形式美を特徴とするシステムチックな響きが、この時代の音楽の特徴と言えるだろう。



※代表的な作曲家

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732～1809)
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～1791)
ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827)
フランツ・ペーター・シュベルト (1797～1828)

5 : ロマン派 (19 世紀初頭～20 世紀初期) : ひと括りでは表せない個性溢れる表現手法

19 世紀に入ると、それまでの理性偏重で合理主義的な考えに反発する形で、感受性や主観に重きを置く考え方 (ロマン主義) が生まれ、この精神にのっとる形で誕生したのがロマン派音楽。古典派によって洗練された音楽形式を下地にして、個人的な思想や感情などを落とし込み、新しい音楽を追求していった。ロマン派時代は表現に重きが置かれ、新しい音楽が追求されたため、さまざまな表現手法が生まれることになる。



- 前期ロマン派：自分を表現した“芸術的”な音楽 メンデルスゾーン、ショパン、シューマン
- 新古典派：ロマン派時代に古典派音楽の技法を使って作曲された音楽 ブラームス
- 国民楽派：ロマン派音楽に民族主義の考えを取り入れたもの スメタナ、ドヴォルザーク
- 西欧派：音楽後進国内で西欧的な音楽を目指したもの チャイコフスキー

6 : 近代 (1890 年～1920 年) : ふんわりとした「印象主義」の時代

近代音楽の時代は、美術における「印象派」が活躍した時代でもあった。そのため音楽でも、ロマンを換気させる「印象主義」が台頭する。印象派の絵画がぼんやりとした色使いのものが多くのように、印象主義音楽でもそれまでの理論や形式とは別の技法を編み出し、ぼんやりと夢見心地的な音楽が多く作られた。



※代表的な作曲家

クロード・ドビュッシー (1862～1918)
モーリス・ラヴェル (1875～1937)